

### ダグール語音韻史の再構成(3)

—軟口蓋音の諸相からみたダグール語の方言分岐—

大竹昌巳

#### 1. ダグール語方言概観

本稿では、ダグール語内部で方言的差異を示す音韻的特徴、特に硬音の軟口蓋音(k, x)および語頭の\*hの状況について取り上げ、方言分岐の問題について検討する<sup>1</sup>。

ダグール語の方言区分については、Čenggeltei ([1957-58] 2010: 224), 恩和巴图编著(1988: 22-26), 丁石庆(1994, 2006: 265-302, 2008)等が認めるブトハ, チチハル, ハイラル, 新疆の四分論が一般的である<sup>2</sup>。以下ではまず、この4方言の使用地域や先行文献等について略述する。



【図1】ダグール族分布地域

<sup>1</sup> 本稿は、旧稿の附録部分の一部を大幅に加筆したものである。

<sup>2</sup> ダグール語の方言区分に関するその他の説については、丁石庆(2006: 271-275)を参照。

## 1.1 ブトハ方言

ブトハ(布特哈)方言は、伝統的に batgənc̥ɛŋ (Dag. batgəŋ, WMan. budxa は「狩猟」の意) と呼ばれる地域集団で話される方言である。恩和巴图编著(1988: 23)はブトハ方言を、かつての分布地域に基づいてさらに 4 つの下位方言(ナウン, ネメール, メルゲン, アイグン)に区分している。

ナウン方言(納文土語)は, naunc̥ɛŋ と呼ばれる地域集団で話される方言で, 現在は主に嫩江(naun̥ mur)上中流域の西岸, ダグール族唯一の自治区であるモリンドワー(莫力達瓦)ダグール族自治旗(以下, 莫旗)に分布する。かつてダグール人は嫩江兩岸一帯に居住していたが, 清末以降の漢族農民の大量流入により, とりわけ東岸地域(現訥河市域)のダグール人は西岸の莫旗の山地(諾敏河・甘河流域等)へ移住した。莫旗はダグール人が最も集住する地域の一つであり, 民族人口は 32,081 人であるが, 同旗全人口の 9.4%を占めるにすぎない(2011 年時点)<sup>3</sup>。

ネメール方言(訥謨爾土語)は, nəm̥ɔrc̥ɛŋ と呼ばれる地域集団で話される方言で, かつては嫩江東岸の支流ネメール河流域(現訥河市・五大連池市域)に分布していたが, 清末以降, 当地域のダグール人もほとんどが莫旗等に移った(満都尔图主编 2007: 124)。

メルゲン方言(墨爾根土語)は, mɔrgənc̥ɛŋ と呼ばれる地域集団で話される方言で, 現在は嫩江上流域の莫旗北東部ハダヤン(哈達陽)鎮等で話されていると思われるが, 未詳。かつては東岸の嫩江県にも分布していたが, 現状は不明。

アイグン方言(瑗瑗土語)は, aigunc̥ɛŋ と呼ばれる地域集団で話される方言で, 黒竜江沿岸の黒河市愛輝区・孫呉県等に分布する。当地域には 2 つのダグール民族郷(坤河達斡爾族満族郷(ダグール族人口 773 人)および沿江満族達斡爾族郷(同 650 人)(人口はともに 2000 年時点))がある(満都尔图主编 2007: 66)。

ブトハ方言については, ナウン方言のみが豊富な資料を有する(語彙集・辞書類を中心に挙げると, Martin 1961, 仲素純编著 1982, 恩和巴图编 1983, Namcarai & Qaserdeni 1983, 恩和巴图等编 1984, 孙竹 1985, Тодаева 1986, 那順达来编著 2001 等)。ネメール方言については, 服部(1951: 71), 巴达荣嘎(1982: 90, 1988: 66), 恩和巴图编著(1988: 125f, 128)等に音韻的特徴に関して断片的な記述があるにすぎないが, その特徴はナウン方言とは顕著な違いを呈する(後述)。メルゲン方言とアイグン方言については, 清末の 1890 年に調査を行った Ивановский (1894)が文例と語彙を収集しており, 少量ながら貴重な資料を提供している。それによると, メルゲン方言はナウン方言と大きな差異はなく, アイグン方言もナウン方言に近い特徴を有する(後述)<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> 莫旗内のダグール人による言語使用の現状については, 丁石庆主编(2009)を参照。

<sup>4</sup> 以降の節では, 「ブトハ方言」を「ナウン方言」と同義に扱う。したがって, ネメール方言やメルゲン方言, アイグン方言はブトハ方言には含めない。これとは別に, 「ブトハ地区」という用語を, 旧ブトハ旗(第 4 節参照)地域に対して用いる。ここにはナウン方言とネメール方言の分布地域が含まれる。

## 1.2 チチハル方言

チチハル（齊齊哈爾）方言は、xotunčēŋ ~ kotunčēŋ (xotuŋ ~ kotuŋ は「都市」の意) と呼ばれる地域集団で話される方言で、主に嫩江中流西岸のチチハル市メイスル（梅里斯）ダグール族区（民族人口 12,368 人）、フラルギ（富拉爾基）区（同 5,824 人）および東岸の富裕県（同 6,049 人）等に分布する（人口はいずれも 2000 年時点）。当地域には 5 つのダグール民族郷があり、ダグール人の最も集住するもう一つの地域となっている。当地域も漢族の流入が激しく、内蒙古自治区のエウエンキ（鄂温克）族自治旗やジャラントン（扎蘭屯）市、アルーン（阿榮）旗等へ移住した者も多い。

チチハル方言に関しては、語彙集として胡和編（1988）、ほかに Yu & Kwon (2004) 等がある。また、当地出身の欧南・烏珠爾氏によるいくつかの著作があるが、筆者未見。

## 1.3 ハイラル方言

ハイラル（海拉爾）方言は、嫩江流域とは大興安嶺を隔てたフルンボイル（呼倫貝爾）地域で xailārčēŋ と呼ばれる地域集団が使用する方言である。フルンボイルの中心地であるハイラルの南郊、エウエンキ族自治旗（ダグール族人口 13,943 人（2000 年））に属する南屯（*əməl ail*, 現バヤントホイ（巴彥托海）鎮）とメケルト（莫和爾図, 現バヤンチャガンソム（巴彥嵯崗蘇木）政府所在地）に主に分布する。1950 年代のチチハル地区から南屯への大規模な移住やブトハ地区から現バヤンタラ（巴彥塔拉）ダグール民族郷等への移住により急激な人口増加が生じたが、1932 年にはハイラル地区のダグール人はわずか 92 戸であった（内蒙古自治区編輯組 1985: 6）。

ハイラル方言に関しては、語彙集として Понне (1930), Poppe (1934), 津曲 (1986), ほかに津曲 (1985), 角道 (1987), 塩谷 (1990), 山田 (2011) 等がある。

## 1.4 新疆方言

新疆方言は、新疆ウイグル（維吾爾）自治区に居住するダグール人により使用される方言で、主に塔城市（ダグール族人口 4,405 人（2000 年））に分布する。市内には阿西爾ダグール民族郷があり、半数程度が同郷内に居住している（満都爾图主編 2007: 66）。

新疆方言に関しては、辞書・語彙集として开英編（1982）、Yu et al. (2008)、ほかに丁石庆（1995a, 1995b）等がある。

方言間の言語学的差異については、次節で扱う 2 つの顕著な音韻的特徴を除いて本稿では触れない。それらについては、上述の諸研究、特に恩和巴图編著（1988: 22-26）および丁石庆（2008）を参照されたい。各方言の成立過程については、第 4 節で検討を加える。

## 2. ダグール語方言区分の指標

ダグール語内部の方言的差異はそれほど大きくないが、その中では顕著な差異を呈する音韻的特徴としてよく取り上げられるのは、硬音の軟口蓋音 k, x の分布および語頭の \*h の状況である（例えば恩和巴图编著 1988: 125f, 128）。

表 1 はモンゴル文語の q/k との対応関係を示したもので、(1)には성백인 외 (2010)の附録の基礎語彙 100 から関連する各方言の語例をいくつか示した。

【表 1】ダグール語諸方言におけるモンゴル文語の q/k との対応原則（前稿表 1 を再掲）

	モンゴル文語		ブトハ	新疆	チチハル	ハイラル	ネメール
語頭	a, o, u の前	q	x, k	x, k	x	x	k
	e, ö, ü, i の前	k	k, x	k, x	k	k	
非語頭	a, o, u の前	q	k	k	k	x	
	e, ö, ü, i の前	k				k	

(1)	「鼻」	「足」	「舌」	「歩く」	「耳」
WMon.	qabar, qamar	köl	kele(n)	alqu-	čiki(n)
B1	'xa'mər, 'xa'mərə	'kulī	'xəlī	'alkö'be, 'alkö'be, 'alkü'be	'ʧikī
B2	'xa'mər	'kulī	'xəlī	'alkü'be	'ʧi'ki
B3	'xa'mər	'kulī	'xəlī	'alkü'be	'ʧi'ki
B4	'xa'mər	'kulǎ, 'kulī	'xəlī	'alkü'be	'ʧi'ki
B5	'xa'mər	'kulī	'xəlī	—	'ʧi'ki
C1	'xa'mər	'kulǎ, 'kul	'kəl	'alkö'be	'ʧikü, 'ʧik
C2	'xa'mər	'kulī, 'kul	'kəl	'alkü'be	'ʧikü, 'ʧik
C3	'xa'mər	'kul	'kəl	'alkü'be	'ʧikü
C4	'xa'mər	'kul	'kəl, 'xəl	'alkü'be	'ʧikü
C5	'xa'mər	'kulü	'kəl, 'xəl	'alkü'be	'ʧikü
S1	'xa'mər	'kulī	'xəl	—	'ʧikü
S2	'xa'mər	'kyl, 'kul	'xəl	—	'ʧikü
H	'xa'mər	'kulī	'kəlī	'alxü'we	'ʧikü, 'ʧik
N <sup>5</sup>	'ka'mərə	'kulī	'kəlī	—	'ʧikī

(B = ブトハ, C = チチハル, S = 新疆, H = ハイラル, N = ネメール)

<sup>5</sup> この話者には従来記述されているようなネメール方言の音韻的特徴とは反する特徴も見られる。註 20 を参照のこと。

表から分かるように、チチハル・ハイラル両方言では、その位置に応じて文語の q/k と規則的な対応をなす。それに対し、ブトハ・新疆両方言では、語頭の WMon. q/k には破裂音 k も摩擦音 x も対応する。この不規則な対応については、次節で扱う。ブトハ方言の下位方言とされるネメール方言は、破裂音 k のみが立ちうるとされ、ブトハ（ナウン）方言とは全く異なる状況を呈している。

次に表 2 は、いわゆる「語頭の \*h」との対応関係を示したもので、(2)に前掲書から各方言の語例をいくつか示した。

【表 2】ダグール語諸方言における語頭の \*h との対応原則

先ダグール語		ブトハ	新疆	チチハル	ハイラル	ネメール
*i の前	*h (< *p)	x ~ š	x ~ š ~ Ø	š	Ø	Ø
その他		x	x ~ Ø	x		

(2)	「星」	「灰」	「肝臓」	「頭」	「大きい」
WMon.	odu(n)	ünesü(n)	elige	eki(n)	yeke
MMon.	hodu(n)	hünesü	helige(n)	heki	yeke
B1	'xodö, 'xodũ	'xunsũ	'xə'lux, 'xə'luxũ	'xəkĩ, 'xə'ki	'xi:xũ, 'xi:x
B2	'xodö	'xunşũ	'xə'luy	'xə'ki, 'xəkĩ	'ʃi:γũ
B3	'xodö, 'xodũ	'xunsũ	'xə'luy, 'xə'luyǎ	'xə'ki	'ʃi:γũ
B4	'xodö	—	'xə'luy	'xə'ki	'xi:γũ
B5	'xodö	'xunsũ	'xə'luyǎ	'xə'ki	'xi:γũ
C1	'xodö	'xunsũ	'xəlyǎ	'xəkũ	'ʃi:γũ, 'i:γũ
C2	'xodö	'xun'suu	'xə'luyǎ	'xəkǎ	'ʃi:γũ
C3	'xodũ	'xunsũ, 'xunsũ	'xəlũy, 'xəly	'xəkũ	'ʃi:xũ
C4	'xodö	'xunsũ	'xəlũyǎ	'xəkũ	'ʃi:γũ, 'ʃi:xũ
C5	'xodũ	'xunşũ	'xəlũyǎ	'xəkũ	'ʃi:xũ
S1	'xodũ, 'xod	'xunsũ, 'xuns	'xə'luy	'əkũ	'i:xũ, 'i:x
S2	'xodũ, 'xod	'xunsũ, 'xuns	'xə'luy	'əkũ	'i:xũ, 'i:x
H	'odũ	'unsũ	'əlũyǎ, 'əlũy	'ə'ki	'i:γũ, 'i:x
N	'odö	'unsũ	'əlũyǎ	'əkĩ	—

語頭の \*h は、現代ダグール語では独立の音素としては存在せず、いずれの方言でも別の音に変化している。ブトハ方言とチチハル方言では軟口蓋摩擦音 x に合流し (i の前では口蓋化して ɣ と発音されることも多い)、ハイラル方言およびネメール方言では消失した。新疆方言では、多くは x に合流したが、一部では消失した。

### 3. ブトハ・新疆方言における語頭の硬音軟口蓋音の分布

前述のように、ブトハ方言と新疆方言における語頭の k/x は、きわめて不規則な分布をなしている。ただし、各語彙の語頭音がどちらをとるかは、両方言でほぼ一致している。試みに 20 例ほど挙げると、以下のようである。

(3) Dag.B	Dag.S <sup>6</sup>	WMon.	gloss
kalēr	kalêr / kalija:r	qaliyar	山韭菜
kark <sup>w</sup> -	karkugu / karko:bje	qadqu-	扎, 插, 刺, 蜚
kartəs	kartes / kartəz	qabtasu(n)	木板
kək <sup>w</sup>	keuk / kəwk	keüken, kegüken	儿子
kāl <sup>j</sup>	keli / kə:l	kebeli	腹, 肚子
kičə-	kiqegu / kičə:bje	kičiye-	注意; 用功
kirə	kire / kirə:	kirüge	锯
kodir	kodir / kodər	quddug, quduç	井
koč-	koqigu / kočibje	quči-	包
konšör	konxor / konšur	qongsiyar	鸟喙
kuis	kuis / kujs	küisü(n)	脐, 肚脐
kurd	kurd / kurd	kürdü(n)	轮
xanêd	hanêd / xanjəd	qaniyadu(n), qaniyad	痰
xāri-	harigu / xa:rjbje	qagari-	烤, 烙, 煎
xəd	hed / xəd	kedü(n)	几, 几个
xon <sup>j</sup>	honi / xonj	qoni(n)	绵羊
xorō	horo / xoro:	qurugu(n)	指头
xuǰū	huju / —	küjügüü	颈, 脖子
xuls ~ xull	huls / xult	kölüsü(n)	汗
kails	hails / xajld	qailasu(n)	榆树
xudə	kude ~ hude / kudə:	ködege(n)	陆地, 草地

喻世长 (1983: 24) は、この破裂音か摩擦音かを決定する条件について、男性語・女性語を問わず、第二音節に硬音 t, ç, s, ...がある時には語頭音は破裂音 k であり、このような条件にない語では語頭音はすべて摩擦音 x であると述べている。この指摘 (の前半部分) は、きわめて興味深い。というのも、第二音節頭に硬音がある場合、x である例はほとんどない

<sup>6</sup> 以下、新疆方言のデータには开英编 (1982) を用いる。ただし、/ で区切った場合にはその右に Yu et al. (2008) の附録の語彙集のデータも示した。いずれも表記は原文のまま。开英编 (1982) については、e, h, j, q, x が [ə, x, j, ç, ʃ] を表す。ê は ie や ye の代用とあるが、ü についての説明はない。

からである<sup>7</sup>。

ところで、例によって満洲語由来の借用語を見てみると、ブトハ・新疆両方言において、満洲語の語頭の k は常に Dag. k で対応する (4a) が、語頭の x は Dag. x で対応する場合 (4b) と Dag. k で対応する場合 (4c) のあることに気づく。

(4)	Dag.B	Dag.S	Dag.C <sup>8</sup>	Dag.H <sup>9</sup>	gloss	WMan.	Man. <sup>10</sup>
a.	kangəŋ	—	han'gn	—	口実	< kanagan	—
	kōlǐ <sup>11</sup>	—	hoil	—	法律	< kooli	'qo:le
	kumuŋ	kumun	kumun	—	音楽	< kumun	ku'mun
b.	xal	hala	hal	халă	氏族	< xala	χa:la
	xafəŋ	hafun ~ hawen	hafn	—	官吏	< xafan	χa:'vʌn
	xərgəŋ	hergen	hergn	kərgəŋ	文字	< xergen	(xurɣum)
	xəs	hes	hes	—	命令	< xese	xu:zɿ
	xudā	huda	huda	xudaa	値段	< xūda	χu'da:
c.	kačɨŋ	haqin ~ kaqin	haqn	xā'q'ıŋ	種類	< xačın	χa'tçin
	kokɨ	hoki ~ koki	ho'k	—	仲間	< xoki	(χo:ke)
	kotuŋ	koton	hotn	xo't'õŋ	都市	< xoton	χo'tøn

一見して明らかのように、第二音節に硬音の閉鎖子音 t, ç, k がある場合には、満洲語の語頭の摩擦音 x はブトハ方言の破裂音 k と対応する<sup>12</sup>。このことは、満洲語語彙の借用時期あるいはそれ以後にダグール語の一部の方言において、第二音節に硬音があるという条件の下で \*x > k という「破裂音化」が存在したことを示唆する。この音変化はチチハル方言やハ

<sup>7</sup> 閉鎖子音 t, ç, k に関する例外は Dag.B xitə, Dag.S xite (WMon. kitüge) 「炕沿」と Dag.B xaiç, Dag.S haiqi (WMon. qairu(n)) 「鱗」の2例のみ。摩擦音 s, š に関しては、この段階で \*CVCVCV(C) の音節構造が保たれていたとすると正例9例に対して例外は3例あり、syncopeにより \*CVCCV(C) になっていたとすると、例外はさらに3例増える(正例12例)。

<sup>8</sup> 胡和編(1988)に拠る。表記は原文のまま。e, h, q, zh は [ə, x, ç, ʃ] を表し、a', o', oi はそれぞれ [æ], [œ], [œ:] を表す。n' は後続子音と調音点同化を起こさない [n] である( ' のない n は調音点同化を生じ、語末では「半鼻音」である)。また、第二音節以降の短母音は無表記、長母音は母音1字で表記されていることに注意されたい(ただし、kumun など一部非初頭音節の短母音を母音1字で表記したと思しき例もある)。

<sup>9</sup> Понне(1930)および津曲(1986)に拠る。前者のキリル字表記および後者のローマ字表記はそれぞれ原文のまま。

<sup>10</sup> 清格尔泰(1982)に拠り、不足部分を恩和巴图(1995b)から補って( )で括って示した。

<sup>11</sup> 恩和巴图等編(1984)では Dag. kōlǐ は WMon. qauli との同源語とされるが、ダグール語で初頭音節の \*au は原則として Dag. au となる(cf. gaulǐ (WMon. gauli) 「黄銅」、taulǐ (WMon. taulai) 「兔子」)ので、Dag. kōlǐ は直接には満洲語から借用されたと考えた方がよい。

<sup>12</sup> 満洲語の借用語の場合は、第二音節に摩擦音があっても語頭音は k とはならない(ただし例外として Dag.B kašē-, Dag.S kaxêgu (WMan. xaša-) 「刷洗(鍋、碗)」)。このことは満洲語において有声音間の摩擦音音素 /t/, /s/, /ʃ/, /x/ が有声化することと関係があると思われる。

イラル方言（の基礎となった言語変種）では生じなかったと考えられる<sup>13</sup>。

この音変化を認めることで、ブトハ・新疆両方言の一部の語彙において男性母音の前にも関わらず破裂音 k が立つことを説明することができる。

この音変化は \*h が x に合流する以前に完了したと考えられる。なぜならば、\*h に由来する x は、第二音節頭に硬音があっても絶対に破裂音 k にはならないからである（以下は一例）。

(5) Dag.B	Dag.S	MMon.	WMon.	gloss
xasō-	hasogu / xaso:bjē	hasaq-	asagu-	問
xatā	hata / —	—	atac_a(n)	志気, 上进心
xəki	eki ~ heki / ək	heki	eki(n)	頭
xič-	hiqigu ~ xiqigu / xičibje	hiče-	iče-, iči-	害羞
xorč-	horqigu / xorča:bjē	horči-	orči-	回头
xukur	ukur ~ hukur / ukur	hüker	üker	牛

しかしながら、\*x > k の音変化のみでブトハ・新疆両方言における k/x の不規則分布のすべてを説明できるわけではないことは、(3)の例を見れば明らかである。他の条件についても考える必要がある。

いま、かつての第二音節の頭子音に硬音をもつ語をすべて除外した上で、モンゴル文語の q/k に対応する語頭の軟口蓋音が摩擦音であるか破裂音であるかを後続する母音別に集計すると、表 3 のようになる（ブトハ方言を対象とする。派生語や擬声語・擬態語、感嘆詞は除いた）。

【表 3】ブトハ方言における後続母音別 k/x の割合

	x_	k_	摩擦音率	xi_	kj_	摩擦音率	x <sup>w</sup> _	k <sup>w</sup> _	摩擦音率
_a	47	12	79.7%	0	5	0.0%	10	0	100%
_o	26	14	65.0%						
_ə	13	8	61.9%				2	4	33.3%
_u	17	14	54.8%						
_i	1	7	12.5%						

この表から、いくつかの制約ないし傾向が読み取れる。

まず、第二音節頭に硬音がある場合を除いて、固有語では母音 a の直前に k<sup>w</sup>は立たない。

<sup>13</sup> ネメール方言においては、この変化が生じ（その後で残りのすべての\*x も k になった）可能性はあるが、それを支持するデータはない。

x<sup>w</sup>a という音連続は、短母音\*a が後続する PDag. \*xu, \*xo に遡るが、これらは男性母音であるから、摩擦音が立つのは自然である。次に、\*h に由来する x を除いて、固有語では母音 a の直前に x は立たない。kia という音連続は、短母音\*a が後続する PDag. \*ki に遡るが、\*i は中性母音であるので、破裂音が立つのはやはり自然である。

ところで、\*h に由来する x を除けば、母音 i の直前には 1 つの例外を除いて k のみが立ちうる。また、母音 ə の直前には、2 つの例外を除いて k<sup>w</sup> のみが立ちうる<sup>14</sup>。どちらの母音も女性・中性母音であるので、多くの語で破裂音 k が立つのは自然と言える。これらの例外となる 3 例は、Dag. xī- (WMon. ki-) 「する」と Dag. x<sup>w</sup>ā (WMon. kö) 「煤」、Dag. x<sup>w</sup>ā- (WMon. kögege-) 「腫れる、膨らむ」である<sup>15</sup>が、これらはいずれも開音節からなる単音節語である。ここで同種の語を拾い出してみると、いずれの語頭音も摩擦音 x である。

(6) Dag.B	Dag.S	WMon.	gloss
xā-	hagu / xa:bje	qaga-	关, 堵, 挡
xī-	higu / xi:bje	ki-	做, 干
xō	ho / —	qau	全, 都
xū	hu / xu: ~ ku:	kümün	人
x <sup>w</sup> ā	hüe / xwə:	köge, kö, kögege	黑灰, 锅烟子
x <sup>w</sup> ā-	hüegu / —	köge-, kögege-	肿, 胀

例が少ないので偶然の可能性を排除できないが、開音節の単音節語では女性・中性母音の前でも\*k が摩擦音 x になるような変化があったのかもしれない<sup>16</sup>。

現在のところ、他の音変化や制約の存在を見出せていないが、傾向としては、男性母音 a (<\*a), o (<\*o, \*u) の直前では x が優勢であり、それに比べ ə (<\*e), u (<\*ö, \*ü) の直前では比較的 k の割合が高い。これは、前稿で推定したような、男性母音の前では語頭で摩擦音\*x が、それ以外の母音の前では破裂音\*k が立ちえたとするかつてのダグール語の分布を前提とすれば理解しやすい。

そうであるならば、男性母音の直前では x であるのが基本であり、k である場合には何らかの理由があると考えなければならない。これに関して、一つの理由はすでに見たように後続の硬音による\*x > k の音変化のためであるが、他に、固有語に見えて実際には借用語であるという可能性もある。

<sup>14</sup> wə (wə) という連続は実際には wā という長母音の形で存在する 경우가ほとんどで、これは固有語の場合、PDag. \*ō に遡るものである。

<sup>15</sup> Dag. x<sup>w</sup>ās (WMon. kögesü(n)) 「泡沫; 脓」や Dag. x<sup>w</sup>ār- (WMon. köger-, kögere-) 「(饭菜因锅开而) 涌出」などは Dag. x<sup>w</sup>ā- の派生語にカウントしている。

<sup>16</sup> 固有語以外ではこの原則に反する例がある。Dag.B k<sup>w</sup>ā, Dag.C kuaa (<WMan. xūwa, Man. χουα) 「院, 宅」、Dag.B kō, Dag.C hoo ~ koo (<Ch. 壺 hú, WMon. quu) 「壺, 酒壺」、Dag.B kū (<Ch. 庫 kù, WMon. küü) 「库」等。

(7)	Dag.B	Dag.S	Dag.C	WMan.	WMon.	gloss
a.	kaltār	kaltar	kaltar	kaltara	qaltar	枣骝马
	karā	—	kara	kara	qara	黑色的 (马)
	cf. xar	har	har	—	qara	黑色的
	kəir	keir	keir	keire	keger	枣红马
	koŋgōr	kongor	hongor	konggoro	qonggur	淡黄色的 (马)
	k <sup>w</sup> al	kual	kual	kūlan	qula	淡黑鬃黄色 (马)
b.	kalōr	kalor	kalor	kailun	qaligun	海骝 (马的毛色)
	cf. xalō	halo	ha'lo	hailun	qaligu	水獭
	kobuŋ	kobun	kobn	—	qubing	酒嗉子 (< Ch. 壺瓶 húpíng)

(7a)はいずれも馬の毛色,あるいはその毛色をもつ馬を意味する語彙であるが,ブトハ・新疆両方言において語頭に破裂音 *k* が現れている。筆者はこれらを固有語ではなく満洲語からの借用語と判断する (したがって表3ではカウントしていない)。その根拠は,まず音形式がモンゴル文語よりも満洲文語に近いこと (Dag. *kəir* は明らかに WMon. *keger* よりも WMan. *keire* に対応する。また, Dag. *kaltār*, *karā*, *koŋgōr* における長母音は,モンゴル固有語だとすると不規則な対応となる),さらに,固有語において男性母音の前では *x* が現れるべきチチハル方言においてさえ, (Dag.C *hongor* を除いて) *k* が現れていることである。チチハル方言では,借用語が固有語の *k/x* 分布に従わずに本来の調音方法を保存する場合がある (4b)。

(7b)は同様に,男性母音の前にも関わらずチチハル方言で破裂音 *k* が現れる例であるが,恩和巴图等編 (1984) では固有語が引き当てられているものの,やはり語形も完全には対応しないので,祖語から直接継承した語彙ではないのかもしれない。

母音 *a*, *u* の前の軟口蓋音についても,チチハル方言やハイラル方言では破裂音 *k* が立つのが原則であるにもかかわらず,摩擦音 *x* が立つ少数の例があることには注目すべきかもしれない。この中には基礎的な語彙が多く含まれることが注意される。

(8)	Dag.B	Dag.S	Dag.C	Poppe (1934) <sup>17</sup>	WMon.	gloss
	xədul-	hedulgu	hedlg ~ heslg	—	kedül-	渡水
	xəiŋ	hein	hiin ~ hein	χeṽ (xein)	kei	风
	xəŋgər	henger	hengr	—	kengküreg?	(牲畜、野兽的) 胸腔
	xār	her	heer	—	keger_e	野外, 野地
	xū	hu	kuu	χū (xu)	kümün	人
	xuṽ	huju	kuzhu	χuṽ (xuṽ)	küjügüü	颈, 脖子

<sup>17</sup> 当論文はイタリック体のローマ字と満洲文字で,メケルト *məkārt* のハイラル方言を表記しているが,満洲文字はローマ字転写し, ( ) で括って示した。なお, Poppe の *u* は中舌の円唇狭母音 [u] を表す。

xuls	huls	kuls	<i>χulsu</i> (xulsu)	kölüsü(n)	汗
xuŋgār	—	hunger	—	küŋkel	沙葱
xurguŋ	hurgun	kurgun	<i>χurgen</i> (xurgen)	kürgen	女婿

ハイラル方言に関しては、津曲（1986）にも *kəiŋ* ~ *xəiŋ* や *kujuu* ~ *xujuu* という例（調査協力者は南屯出身）、山田（2011）にも *hujuu* の例（調査協力者はメケルト出身）があり、19世紀の著名な文士アラブタン（敖拉・昌興，1809-85，南屯出身）の詩にも *xuu* や *xein* といった例が見られる。

ただし、チチハル方言とハイラル方言とでは摩擦音 *x* をもつ語が Dag. *xəiŋ* を除いて一致しないので、これらの *x* が祖語に遡るような性質のものではないと考えられる。

#### 4. ダグール語諸方言の成立過程

##### 4.1 ダグール人の移動・分散過程

以下ではまず、『達斡爾族簡史』や『達斡爾族社会歴史調査』の記述に拠り、17世紀半ば以降のダグール人の移動・分散過程について俯瞰する。

序論でも簡単に触れたように、ダグール人は17世紀半ばまで黒竜江（*xar mur*，アムール川）上中流域やその北岸の支流ジンキリ（精奇里）江（*jinkir mur*，ゼーヤ川）流域の広い地域に、周囲をトゥングース系の民族に囲まれて分布していた。やがて黒竜江一帯は新興勢力である清とロシアの衝突地帯となり、清朝に帰順したダグール人は徙民政策によって漸次嫩江流域へ移住する。

嫩江上中流域へ移住したダグール人は、清朝の行政単位であるニル（WMan. *niru*）に編成され、その上位組織である3つのジャラン（WMan. *jalan*）を形成する。ドゥブチェーン＝ジャラン（都博浅扎蘭）は黒竜江上流域から移住したオノン（鄂嫩）ハラ（ハラ（WMan. *xala*）は「氏族」の意）によって編成され、嫩江上流域に分布した。メルデン＝ジャラン（莫日登扎蘭）はその南に分布し、ジンキリ江上流域から移住したアウラ（敖拉）ハラと黒竜江上流域から移住したメルデン（孟爾丁）ハラを中心に成立した。また、ネメール＝ジャランはネメール河流域に分布し、ジンキリ江下流域から移住したゴボル（郭博勒）ハラとデードウル（徳都勒）ハラを中心に成立した。のちにこれら3ジャランは、同じく黒竜江北岸から移住してきたトゥングース系のソロン（索倫）人の5アバ（WMan. *aba*，ジャランと同じく組織単位）とともに「ブトハ八旗」を形成する。この地域がブトハ（ナウン）方言とネメール方言の分布地域に該当する。

一方で嫩江中流域の平原地帯へ移住したダグール人は、1691（康熙30）年にチチハル城が築かれると16個ニルに編成され、満洲人・漢人・バルグ（巴爾虎）人らとともに駐防八旗に組み込まれた。この地域がチチハル方言の分布地域となる。

1684（同23）年には満洲兵らとともにダグール人兵士500名が黒竜江東岸のヘスル（額

蘇里) 地方に派兵され、のち西岸に黒竜江(アイグン) 新城が建設されると当地に移って7 個ニルに編成された。アイグン地区へは 1894(光緒 20) 年にもブトハ・チチハル地区から数百名のダグール兵が派遣された。この地域がアイグン方言の分布地域に当たる。

1688(康熙 27) 年にはブトハ地区のダグール・ソロン兵 1000 名が派遣されてメルゲン城の建設に従事し、1690(同 29) 年にも 420 名が新たに派遣されて、当地に駐防したダグール人は 5 個ニルに編成された。この地域がメルゲン方言の分布地域となる。

1732(雍正 10) 年にはブトハ地区のソロン・ダグールら兵士 3000 名がフルンボイル地方へ移駐したが、農耕を主体とするダグール人の生活が当地の寒冷な気候に適さず、1742(乾隆 7) 年には派遣されたダグール人のほぼ全員が原籍地へ戻った。ただ、当時官職にあったゴボル=ハラ・マンナ(満那) モコン(WMan. mukûn, ハラの下位氏族) とアウラ=ハラ・デンテケー(登特科) モコンのダグール人家族のみが当地に留まり、のちにブトハ地区からメルデン=ハラ・アルガチェーン(阿爾哈浅) モコンのダグール人一家も加わり、これら 3 家族がハイラル=ダグール人の祖先となった。マンナ=モコンとデンテケー=モコンはハイラル城(現ハイラル区)の南に位置する南屯に居住し(1900 年頃メケルトへも分村)、アルガチェーン=モコンは西屯(Barəŋ ail) に居住した(1938 年に関東軍による用地接収により全住民が南屯へ移住)。これらがハイラル方言の分布地域である。

1763(乾隆 28) 年には、ブトハ地区のダグール・ソロン各 500 名の兵士が家族を携えて新疆イリ(伊犁) 地方へ移駐した。当地のダグール人は 19 世紀後半にタルバガタイ城(塔城) に居を移した。この地域が新疆方言の分布地域に当たる。

## 4.2 ダグール語諸方言の発展・分岐過程

以下では、ダグール人の各地への移駐の歴史とダグール語の方言分布をもとに、どのような方言発展過程を描きうるのか、現在手許にあるデータに基づいて検討する。

1680 年代の嫩江流域から黒竜江城への移駐に由来するアイグン方言は、Ивановский(1894) を見る限り、硬音が後続する場合に男性母音の前でも k が現れるブトハ方言に特有の音韻的特徴を有している(9)<sup>18</sup>。アイグン方言の成立には、現代ブトハ方言へと発展する言語変種に近い変種が関与していると考えられる。このことから、\*x > k の音変化は 1680 年代以前には始まっていた蓋然性が高い。

同時期のブトハ地区からメルゲン城への移駐に由来するメルゲン方言は、ブトハ方言とは差異の小さい変種である(9)。このことは、当時すでに現代ブトハ方言と類似する音韻的特徴をもった変種がブトハ地区に存在したことを示唆する。ただし、メルゲン方言はブトハ方言とは地理的に隣接するため、後代に影響を受けた可能性もある。

<sup>18</sup> ただし、資料の範囲内では母音 a, u, i の前には破裂音 k しか立たないところに特徴がある(\*h に由来する x を除く)。

(9)	Dag.B	D <sup>2</sup>	D <sup>4</sup>	D <sup>6</sup>	WMon.	gloss
a.	kartəs	картыс	картаза	—	qabtasu(n)	板
	katā	кага	кага	кага	qata—?	塩
	kaučij	каоцин ~ хаоцин	—	кауцин	qagučin	古い
	xamər	хамар ~ хамыр	хамурұ	—	qamar	鼻
	xannəg	—	—	хан'дага	qandagai	ヘラジカ
	xorō	хорó	хорó	хурұ	qurugu(n)	指
b.	kək <sup>w</sup>	кэку	кóуке	кэку	keüken	息子
	kulí	күлі	—	күлі	köl	足
	xəd / xədəŋ	хедэн	—	кедэ (D <sup>7</sup> )	kedü(n)	いくつ
	xī-	ɣíbe	кií`bei	кi`bei	ki-	する
	xujū	куцұ	—	—	küjügüü	首
	xū	кú ~ хú	—	ку	kümün	人
c.	xarəb	хárба	хárба	—	arba(n)	10
	xəkí	—	óкi ~ окi	хекi	eki	頭
	xərəg	ɣéryge	xéryge	—	erekei	親指
	xig	ɣíge ~ хíge	—	—	yeke	大きい
	xulāŋ	—	—	хулá	ulagan	赤い

(D<sup>2</sup>, D<sup>4</sup> はメルゲン方言話者, D<sup>6</sup>, D<sup>7</sup> はアイグン方言話者。いずれも Ивановский (1894)による。)

17世紀末に書かれたとされる満洲文字ダグール語叙事詩 *Čooxa-i küwaran-du* (『兵營にて』, Engkebatu 2001: 57-71) は, かつての音節構造を比較的よく保存していると思しき点などに古い特徴を見出せるが, k/x の分布に関しては現代ブトハ方言に近い特徴を有している (xuu : Dag. xū 「人」, xede : Dag. xəd 「いくつ」等)。この文献の存在は上記の推定と矛盾しない。

1760年代のブトハ地区から新疆への移駐に由来する新疆方言も, k/x の分布に関しては現代ブトハ方言とほとんど差異のない特徴を有する。内蒙古自治区編輯組 (1985: 212) によると, 新疆のダグール人のうち, オノン=ハラとアウラ=ハラは人口が多く, 複数のモコンからなるのに対し, 残りのハラは人口が多くなく, 2, 3のモコンからなるにすぎないという。人口の多いハラ言語変種が新疆方言全体の成立に大きな影響を与えたとするならば, オノン・アウラ両ハラが分布していた嫩江の比較的上流寄りの地域には, 18世紀半ばには現代ブトハ方言と非常に類似した言語変種が話されていた蓋然性が高い。ただ, 語頭の \*h に関してはブトハ方言と新疆方言で差異が見られるため, x への合流は 1760年代以降に完了したとみるべきだろう。

ネメール方言については, 服部 (1951: 71) が, Martin (1961)の調査協力者でもあるオノン=ウルグング氏 (自身は嫩江東岸のボコルチェーン屯 (現訥河市清河郷) 出身) の報告

として、「訥河県〔現訥河市〕より上流の Nemeer 河流域に住む Nemeer 族の方言は[qarʉ <黒い>, [qa:ləyʉ] <戸>, [qɔlɔ] <遠い>, [qɔdir] <井戸>, [qa'na's] <何処から>, [aɣe] <兄>, [əkə] <姉>, [ku:] <人>のように古い無声軟口蓋閉鎖音を保存している」<sup>19</sup>と伝えているのを初見とする。

しかし、ネメール河中流に位置するターブンチェーン（塔文浅）屯（現訥河市竜河鎮）のゴボル＝ハラ出身である順泰（1866年生）が1883-92年に編んだ辞典 *Manju nikan daxur kamčixa buleku bidxe*（『滿漢達呼爾合璧詞典』、恩和巴图 1994, 1995a, 1997 参照）のダグール語変種は、明らかにブトハ方言の特徴を示している。これは編者自身の方言ではないのだろうか。しかし、성백인 외 (2010)の調査協力者である郭氏（当時 34 歳）も竜江鎮（竜河鎮？）の出身とされるが、その音韻的特徴もまた明らかにブトハ方言に近い。

結局、目下筆者が目にしたネメール方言に近い特徴を有する変種は、성백인 외 (2010)の附録に基礎語彙数十語が公開されている別の郭氏（1926年生）のもののみである<sup>20</sup>。彼はネメール河上流のホンゴルジン（コンゴルジン）屯（現五大連池市団結郷）の出身である。また、巴达荣嘎（1982, 1988）でネメール方言について言及しているバダルンガ（徳古永）氏（1917-2002）は、自身がネメール河上流に位置するウンチャール（温察爾）屯（現五大連池市青山鎮）のデードゥル＝ハラ出身である。

以上の断片的な情報を総合すると、今まで報告されてきた、破裂音 k のみを有する「ネメール方言」は、ネメール河上流域で話されていたことは確認されるけれども、中下流域では目下確認できない。ことによると、この特徴をもつ変種は、より地理的に限定されていたのかもしれない。既述のようにネメール河流域のダグール人は村を挙げて移住してしまっているため、移住先で居住地の方言を保存している場合もあるかもしれないが、現地の方言の影響を受けている可能性もあり、調査は困難を伴うであろう。

ハイラル方言については、この方言がブトハ地区から分岐したにもかかわらず、現代のブトハ地区の言語変種とはかなり隔たった特徴を備えていることに問題がある。第 2 節で見たように、ハイラル方言では後続する母音の種類によって k/x が規則的な分布を示す。ハイラル＝ダグール人は基本的に嫩江流域のデンテケー・アルガチェーン両モコンとネメール河流域のマンナ＝モコンの 3 氏に遡るけれども、ハイラル方言が、k/x に関して不規則に見える分布を示す現代のブトハ方言のような変種や、破裂音 k しかもたない現代のネメール方言のような変種のどちらか、あるいは両者の収斂から成立するとは少し考えにくいのではないと思われる。筆者としては、南屯のデンテケー＝モコンかマンナ＝モコンのどちらかの変種が、k/x に関して規則的な分布を示す変種だったのではないかと考えたい。

ところで、すでに推測したように、18 世紀半ばには嫩江上中流域のオノン・アウラ両ハ

<sup>19</sup> 前稿で論じたように、これは古い特徴を保存しているのではなく、二次的な改新の結果である。

<sup>20</sup> ただし、この話者にも語によっては非ネメール方言的特徴が見られる。例えば、'xo'jirö (WMon. qoyar) 「2」や'xu: (WMon. kümün) 「人」のように摩擦音 x が観察されたり、'xəurǎ (WMon. eber) 「角」で語頭の \*h に由来する x が観察されたりする。

ラが分布する地域で現代ブトハ方言と非常に類似した言語変種が成立していたとすると、アウラ＝ハラに属するデンテケー＝モコンはその候補から外れる。一方、ゴボル＝ハラのマンナ＝モコンは、ネメール河北岸の、ホンコルジン屯に近いマンナ屯（現訥河市竜河鎮）等に居住していた。現在知られるネメール方言の特徴がいつ成立したかは不明だが、仮に18世紀前半には（少なくともマンナ屯近辺で）まだそのような特徴が成立しておらず、kとxが母音の種類に応じて規則的に分布していたとすれば、現代ハイラル方言はその言語変種を中心に発展したとして理解することができよう。

ハイラル方言やチチハル方言等、規則的なk/x分布を示す方言中に見られる不規則な要素(8)は、複数の言語変種が一つの地域方言へ収斂する過程で、ブトハ方言的変種が残していった痕跡かもしれない。また、ブトハ方言中の不規則なk/x分布自体も、複数の言語変種の収斂の結果であるかもしれない。

## 5. 小結

本稿では、ダグール語の近代史にあたる17世紀半ばの嫩江南遷以降の方言的差異について扱った。この時期のダグール語の発展は収斂と分岐の絡み合う複雑な過程であるから、これを跡付ける作業は容易ではない。本稿では一応の仮説を提出してみたが、あまりにも不確定要素が多く、今後の研究に俟つところが大きい。

## 略号

Ch.	Chinese	漢語
Dag.	Dagur	ダグール語（ブトハ方言）
Dag.B	Butha-Dagur	ダグール語ブトハ方言
Dag.C	Cicihar-Dagur	ダグール語チチハル方言
Dag.H	Hailar-Dagur	ダグール語ハイラル方言
Dag.N	Nemer-Dagur	ダグール語ネメール方言
Dag.S	Sinjiang-Dagur	ダグール語新疆方言
Man.	Manchu	満洲語（三家子方言）
MMon.	Middle Mongolian	中世モンゴル語
PDag.	Pre-Dagur	先ダグール語
WMan.	Written Manchu	満洲文語
WMon.	Written Mongolian	モンゴル文語

## 参考文献

### 【和文】

角道正佳（1987）「ダグール語南屯方言の特徴」『大阪外国語大学学報』第74号，1-18

塩谷茂樹（1990）「ダグール語ハイラル方言の口語資料 —— テキストと註釈 ——」『日本モンゴル学会紀要』第 21 号, 47-95

津曲敏郎（1985）「ダグール語ハイラル方言の音韻体系」『北方文化研究』第 17 号, 227-240

——（1986）「ダグール語ハイラル方言基礎語彙」『モンゴル研究』第 17 号, 2-38

服部四郎（1951）「モンゴル語チャハル方言の音韻体系」『言語研究』第 19/20 号, 68-102

山田洋平（2011）「ハイラル・ダグール語の文法記述 —— 述語人称、所属人称、再帰を中心として ——」東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文

#### 【中文】

巴达荣嘎（1982）《达斡尔语、满洲语、蒙古语的关系》《内蒙古社会科学》1982 年第 2 期, 88-99

——（1988）《达斡尔语与蒙古语异同比较 —— 兼谈达斡尔语的系属》《民族语文》1988 年第 6 期, 61-67

《达斡尔族简史》编写组（1986）《达斡尔族简史》呼和浩特：内蒙古人民出版社

丁石庆（1994）《达斡尔语方言成因试析》《齐齐哈尔师范学院学报》1994 年第 3 期, 73-76, 82

——（1995a）《新疆达斡尔语简述》《语言研究》1995 年第 1 期, 188-195

——（1995b）《新疆达斡尔语语音及其特点》《语言与翻译》1995 年第 1 期, 61-68

——（2006）《双语族群语言文化的调适与重构 —— 达斡尔族个案研究》北京：中央民族大学出版社

——（2008）《达斡尔语简志 方言》《中国少数民族语言简志丛书 修订本 第 6 卷》（孙宏开主编，北京：民族出版社）pp. 301-313

丁石庆主编（2009）《莫旗达斡尔族语言使用现状与发展趋势》北京：商务印书馆

恩和巴图（1994）《《满达词典》研究》《满语研究》1994 年第 2 期, 41-50

——（1995a）《《满达词典》研究（二） —— 满达词汇对照》《满语研究》1995 年第 2 期, 106-121

——（1995b）《满语口语研究》呼和浩特：内蒙古大学出版社

——（1997）《《满达词典》研究（三） —— 满达词汇对照》《满语研究》1997 年第 1 期, 110-127

恩和巴图编（1983）《达汉小词典》呼和浩特：内蒙古人民出版社

恩和巴图编著（1988）《达斡尔语和蒙古语》呼和浩特：内蒙古人民出版社

恩和巴图等编（1984）《达斡尔语词汇》呼和浩特：内蒙古人民出版社

胡和编（1988）《达斡尔语汉语对照词汇》齐齐哈尔：黑龙江省民族研究所、黑龙江省达斡尔学会（载于《达斡尔资料集 第六集》，《达斡尔资料集》编辑委员会编，北京：民族出版社，2005 年，pp. 361-621）

开英编（1982）《达斡尔、哈萨克、汉语对照词典》乌鲁木齐：新疆人民出版社

满都尔图主编（2007）《达斡尔族百科词典》呼伦贝尔：内蒙古文化出版社

- 那顺达来编著 (2001) 《汉达词典》呼和浩特: 内蒙古大学出版社
- 内蒙古自治区编辑组 (1985) 《达斡尔族社会历史调查》呼和浩特: 内蒙古人民出版社
- 清格尔泰 (1982) 《满洲语口语语音》《内蒙古学报 (哲学社会科学版)》纪念校庆 25 周年专刊 (载于《清格尔泰民族研究文集》北京: 民族出版社, 1997 年, pp. 232-355)
- 孙竹 (1985) 《达斡尔语概要 — 兼谈达斡尔语与蒙古语的某些异同》《蒙古语文集》西宁: 青海人民出版社, pp. 559-624
- 喻世长 (1983) 《论蒙古语族的形成和发展》北京: 民族出版社
- 仲素纯编著 (1982) 《达斡尔语简志》北京: 民族出版社

【韩文】

- 성벤인 외 (2010) 『중국의 다구르어와 어웁키어의 문법·어휘 연구』 서울: 아카넷

【蒙文】

- Čenggeltei (1957-58) “Dumdadu ulus-taki monggul törül-ün kele-nügüid ba monggul kelen-ü ayalgu-nugud-un yerüngkei baidal”, *Monggul teiike kele bičig* 1957.11-1958.12. (Čenggeltei-yin jokiyał büütügel-ün tegübüri 1 — angqan-u üy\_e-yin büütügel-üid. Ulaganqada: Öbür Monggul-un sinjilağü uqacan tēgnig mergejil-ün keblel-ün qoriy\_a, 2010, pp. 221- (《清格尔泰文集 第 1 卷, 早期著作》赤峰: 内蒙古科学技术出版社, 2010 年) )
- Engkebatu (2001) *Čing ulus-un üy\_e-dü Dagur kele-ber bičigdegsen jokiyał-ud-un sudulul*. Kökeqota: Öbür Monggul-un yeke surgaculi-yin keblel-ün qoriy\_a (恩和巴图 (2001) 《清代达呼尔文文献研究》呼和浩特: 内蒙古大学出版社)
- Namcarai & Qaserdeni (1983) *Dagur kele Monggul kelen-ü qaričagulun*. Köke-qota: Öbür Monggul-un arad-un keblel-ün qoriy\_a. (拿木四来、哈斯额尔敦 (1983) 《达斡尔语与蒙古语比较》呼和浩特: 内蒙古人民出版社)

【欧文】

- Martin, Samuel E. (1961) *Dagur Mongolian Grammar, Texts, and Lexicon: Based on the Speech of Peter Onon*. Bloomington: Indiana University. (Reprinted by Richmond: Curzon, 1997)
- Poppe, Nikolaus (1934) “Über die Sprache der Daguren”, *Asia Major* 10. 1-32, 183-220.
- Yu Wonsoo, et al. (2008) *A Study of the Tacheng Dialect of the Dagur Language*. Seoul: Seoul National University Press.
- Yu Wonsoo & Kwon Jae-il (2004) “Preliminary remarks on the phonemic system of the Qiqihar Meilis dialect of the Dagur language”, *Journal of the Altaic Society of Korea (Altai hakpo)* 14, 153-184.

【露文】

- Ивановскій, А. О. (1894) «Mandjurica I. Образцы солонскаго и дахурскаго языковъ» Санкт-петербургъ: Типографія Императорской академіи наукъ.
- Поппе, Н. Н. (1930) «Дагурское наречие» Ленинград: Изд-во АН СССР.
- Тодаева, Б. Х. (1986) «Дагурский язык» Москва: Наука.